日本工業大学通信

発行所
日本工業大学
広報課
〒345 埼玉県南埼玉郡
宮代町学園台４－１
☎ 0480(34) 4111

平成２年４月１日より法人名変更

学校法人 日本工業大学 がスタート

〔新名称〕	〔旧名称〕
●学校法人 日本工業大学	●学校法人 東工学園
〔設置学校等〕	〔設置学校等〕
○日本工業大学	○日本工業大学
○日本工業大学附属 東京工業高等学校	○東京工業高等学校
○日本工業大学 附属中学校	○東工学園中学校

長年にわたって多くの在学生、生徒、卒業生、学園関係者に親しまれてきた「学校法人東工学園」の名称が、四月一日より「学校法人日本工業大学」と変更された。

これと共に、高等学校・中学校の名称もそれぞれ次のように改められ、新法人名の下に、日本工業大学を中核とした「一貫工業教育システム」が新たなスタートをきった。

日本工業大学は昭和四十二年、学校法人東工学園によって工業高校に接続するカリキュラムを持つ我が国で唯一の大学として設立された。その後、昭和五十年にはシステム工学科を増設し、昭和五十七年には大学院工学研究科修士課程を、また昭和六十二年には博士課程（後期）を設置、本学の設立母体である東工学園の大きな目標であった、中学校から高等学校、大学、大学院までを備えた「一貫工業教育システム」の完成を見た。

創立以来これまで、日本工業大学は二十三年の歴史を持っているが、本学の設立母体である東工学園も、その歴史は遠く明治四十年まで遡り、すでに八十年余りの歴史を持っている。

すなわち、本学園の出発は明治四十年、日露戦争後の工業の勃興にともなう中堅技術者養成の要望に応えた、東京工科学校の設立であった。その後、学制変更に従い東京工科学校は、東京工業学校（甲種五年制）を経て、戦後の学制改革により、昭和二十三年から東京工業高等学校および東工学園中学校とし、現在に至っている。

このような設置学校をめぐる歴史的背景の下で、学校法人名と設置する大学、高等学校、中学校の名称がそれぞれ異なるという弊害が生じていた。この設置学校間の名称の不統一は、外部からの学校間の繋がりを理解しにくくし、加えて、本学園が誇る「一貫工業教育」の特色を生かす上でも大きな支障となっていた。

そこで今回、日本工業大学を中心とした名称の統一を行い、新時代に向けて、これまで本学園が目指してきた「一貫工業教育」の一層の飛躍を遂げるための第一歩としたものである。

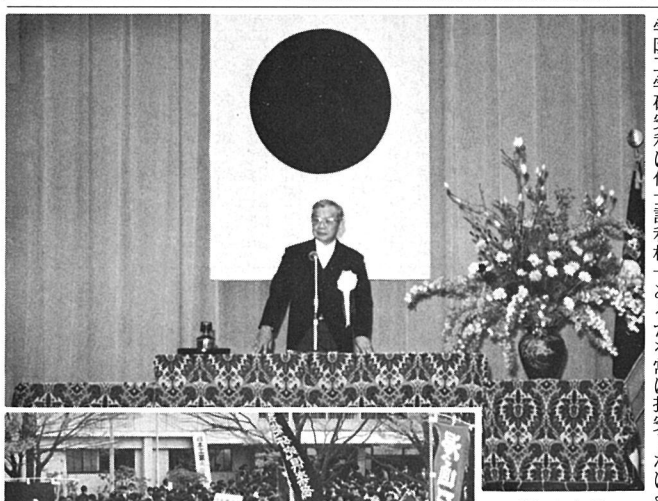
新入生特集

第二十四回入学式挙行

新入生九二二名

平成二年度入学式が、四月四日本学体育館において挙行された。工学部の新一年生は機械工学科二六三名、電気電子工学科二六二名、建築学科二五五名、システム工学科一四二名で、計九二二名（内女子一七名）である。一方、大学院工学研究科は修士課程機械工学専攻一〇名、電気工学専攻二三名、建築学専攻九名で、博士課程（後期）建築学専攻の一名を加えて、合計四三名となった。

式辞において大川学長は、「絶えざる研究と探究の場である大学では、学生は問題が何であるかを常に探究しなければならない。そして、問題が何故そうであるかを研究し、ではどのように解明してゆくか、と言う問題意識を育む努力を惜しんではいけない」という小野健二初代学長の言葉を引用しながら、生徒から真の学生になるためには、主体性をもって問題解決にあたらなければならないとし、解決に至る過程の中で人間性が深まり、成長してゆくのである、と大学生活を前にした新入生を激励した。



学長式辞

クラブ勧誘風景

内蒙古自治区政府派遣研究員着任

日本私立大学協会の内蒙古・新疆学術交流委員会による中国内蒙古自治区からの研究員派遣受入れ要請に協力して、四月十二日客員研究員として蘇和（ソーホ）氏が着任した。同委員会を通じた、客員研究員の本学への来学は、李莎茹拉女史が、昭和六十二年十二月より一年間、同じ中国内蒙古自治区からやってきた例がある。

蘇和氏は一九五一年生まれで、内蒙古工学院卒。専攻は機械製造。現在、内蒙古林学院講師。本学では機械工学科柳沢章助教授のもとで「機械精度設計」に関する研究を一年間にわたり行う予定。

☆　☆　☆

平成二年度 特別奨学生の紹介

平成二年度の特別奨学生は次の十三名で、選考は「学業成績が特に優秀で、優れた特徴・特技を持ち、本学において多方面でリーダー足りうる人物」との基準で行われた。今後の活躍が期待される。

□機械工学科

池辺秀人（筑波大附属坂戸）

木ノ内正太郎（都立工芸）

小池尚男（伊勢崎工）

田口英俊（東京工）

蓑輪誠（京葉工）

河田浩昭（太田工）

□電気電子工学科

□建築学科

小林郁（新津工）

長谷川明典（大宮工）

松井邦男（渋川市立工）

太田明博（尼崎工）

折原宏行（春日部工）

西岡伸一（高知工）

本多良範（蔵前工）

＝＝＝４月１日より法人名が変更になりました＝＝＝

学校法人 日本工業大学 （旧名称：学校法人 東工学園）

〒153 東京都目黒区駒場１－35－32　☎03－467－2130

日本工業大学 〒345 埼玉県南埼玉郡宮代町学園台４－１ ☎0480－34－4111

《工学部》機械工学科　電気電子工学科　建築学科　システム工学科

《大学院工学研究科》□修士課程　機械工学専攻　電気工学専攻　建築学専攻

□博士課程（後期）　機械工学専攻　電気工学専攻　建築学専攻

《附属施設》○工業教育研究所　○工業技術博物館

附属校

〒153 東京都目黒区駒場１－35－32
☎03－467－2130

日本工業大学附属 東京工業高等学校
日本工業大学附属中学校
東京高等工科学校

新入生へのメッセージ

宝の山で知的アドベンチャーを

図書館長　竹内　淳彦

入学おめでとう。諸君は今、これから始まる大学生活に胸をときめかしていることであろう。感激も新たなこの季節に新しい生活について、人生八十年のなかでの大学生活について考えて欲しいと思う。自ら学び、考える大学生活の最大の中心は図書館である。大学入学を機に図書館に大いに親しみ、切っても切れない生活を送って欲しい。私自身、大学に入学し、図書館に初めて足を踏み入れたときの感激を昨日の事のように覚えている。昨年訪れたバーゼルやフランクフルトの大学で、夏休みにもかかわらず、図書館だけが、目を輝かした学生達で一杯であったことも印象に鮮やかである。図書館は大学のシンボルであり、どのようなすばらしい図書館を有し、教員や学生がそれをどう活用しているかによって大学の評価が定まるといっても過言ではない。

本学の図書館は、学生諸君の知的アドベンチャーの場として、その充実に日夜努力を続けている。たとえば、夜間八時三十分まで開館を延長し、学生諸君のニーズに応えている。とくに、クラブ活動に励む学生諸君や卒研生には大いに利用して頂いている。このような開館時間延長は、夜間部を有さない大学としては異例のことである。また、世界・日本の主要な情報を検索したり、取り寄せたりするシステム、他の理工系大学の図書館情報を知ったり、相互に利用できるシステムも確立している。その他、蓄積された情報や最新の技術、名画や外国語教材も多数揃え、学生諸君の利用に供している。このように、本学図書館は、時代が変わり、情報化や技術革新がめざましく進むなかで、狭い意味での技術者でなく、建学の精神にうたわれているような広い視野、識見をもち、技術をベースとした社会人を育成しようとする本学の教育体系のセンターたるべく日々努力を続けている。今年、秋には新しいコンピュータによる検索システムを導入し、図書館の一層の機能向上を図る予定である。今日まで続けられてきた図書館の充実は、教職員、学生の温かい信頼関係に支えられて来たように思う。たとえば、他大学に見られない夜間開館などは、まさにその典型であり、夜の図書館を館員と協力して管理する学生諸君、その中で利用する学生諸君、さらに、大学当局等相互の信頼関係なくしてはなし得ないことである。私はこのことを本学の伝統とし誇りとして守っていきたいと考えている。新入生諸君も、この点を理解し、本来の学びの場のあり方を考え、力を合わせてよい伝統を守り育てる努力を続けて欲しい。

図書館は宝の山であり、しかも本学では、時代の変化に合わせて古典から最新技術まで、探しやすいように、掘りやすいように、鉱道の整備を続けている。この知識と情報の宝の山に若い学徒が目を輝かして訪れ、汗を流して掘り続け、新しい発見を続けてくれることを期待している。

人生にはいくつかのステップがある。大学入学は、大きな喜びと共に、人生八十年の基礎固めをする決意の時である。最初のボタンを掛け違えると最後まで正しく掛けることはできない。長い人生にとって、いまがもっとも大切な時ともいえる。どうか、新しい大学生活のスタートに当たり、新緑のなかで、人生を考え、そして大学生活をどう過ごすかを厳しく考えて欲しい。そして、充実したカレッジライフを送るため、大学のシンボルでもある図書館を中心とした生活を一日も早く習慣づけて欲しい。

教養課程は なぜ、どのように学ぶか

教養科主任教授　矢島　幸雄

教養課程での教育は、人間形成と教養を身につけることを目標としている。さらに基礎教育を行い、工学の基礎をしっかりと学習することで専門の基礎を確立することである。そのようにして工学の技術者、研究者としての素養を身につけることができる。二十才ぐらいまでは、脳細胞が発達し、頭は使うことで神経網がきめ細かくはりめぐらされる。大学の初年次こそ人生の大事な基礎、基盤作りの時であり、それらを滋養として人生の花が開く。

各科目の講義は、集中力をもって聞き、実験、実習を行う時は、全力を傾けてのぞむ。自ら進んで教科書、参考書や自分のノートをよく読んで知識を整理する。解らない事、疑問の点は、友達と討論し、図書館で調べ、さらに先生に質問し、自ら学んで解明するように心がける。そのことで正しい知識が蓄積される。蓄積された知識は、一生涯失われない貴重な財産となる。

作文してみること、書いて表現することもに、他人に話して考えていることを伝えることも大切なことである。これらは、訓練することで上達するので、面倒くさがらずに実行してみることが望ましい。とかく言葉や言語の乱れの多い現在とくに必要なことと思う。また本は、知識の宝庫であるので、本を読み、そこで感動し喜ぶことを味わう。

人文科学、社会科学は、人間として、社会人としての視野を広め、高度の教養ある人として、精神活動の営みを正しくし、文化的で豊かな生活をするためのものである。生活を営むことは、対人関係が生じる。そこでは、相手の立場にたってものを考えるという思いやりの心を持つことである。生活し生きてゆくためのルールを守らねばならない。近頃自己中心的な人、自分勝手な人がみうけられるが、他人を意識して、礼儀作法を守って生活することが望まれる。そこに秩序が生じ、生活しやすい社会が生まれるのである。

自然科学は、理工系大学では、基礎教育科目として重要な位置にある。私たちの身のまわりに起こる自然現象をつかさどる法則、定理や概念で物理、化学の体系が作られ、それらを学ぶことで正しい自然観の形成をめざし、さらに科学的な発想、思考法や表現法を養うことができる。

千六百年代の後半にニュートン力学が生まれた。そこで力学の法則を数式で表現し、現象を正確に、しかも客観的に記述して論理を深めた。その時考えだしたのが微分、積分である。ここで物理を探求する道具としての数学が生まれ、それを使うことで現象の明確な像をとらえることができた。数学を用いることで物理の多くの法則、定理が発見された。物理的な物の見方、考え方と、それらを表現する数学は、物理学さらに工学では切り離すことはできない。工学では数学も重要な基礎科目である。数学の論理は、物事の考え方の筋道を示すものである。数学は、基本となる事を一つづつ学び、自ら問題を手順に従って順序よく解いて理解することである。問題が解けた喜びを味わいながら進むことで理解が深まる。

外国語では、外国の言葉を習い、国際人をめざす。その国の言葉で話をし、一対一で意見交換し、この国の文化、社会事情や情報を知り外国と交流できることをめざす。そのためには、テレビやラジオ放送を利用し、ウォークマンを使って外国語に慣れること、さらに機会があれば外国に出かけ、身体で覚えることもよい事である。

保健体育では、保健衛生の知識を学び、正しい運動方法を習う。規則正しい生活習慣を身につけ、食習慣をしっかり守る。それが健康に生きて行くための第一要件である。クラブ活動やサークルで団体生活し人間を磨くとともに運動につとめる。運動で鍛え蓄えられた体力は一生の宝である。健康な身体によって気力も充実し、やる気もでる。高い目標をもって現在の瞬間を充分に生かし、学生としてきびしく生きることである。その集積としてその人の一生ができあがる。

☆　☆　☆

石崎敬三先生 退任記念講演会

機械工学科石崎敬三教授の退任記念講演会は、三月一日四時より本館二階会議室で開かれた。石崎教授は昭和十九年東京大学工学部冶金学科を卒業後、新日本製鉄に勤務され、昭和四十九年本学に教授として着任された。溶接工学研究室を主宰し、溶接工学・工業材料の科目を担当された。昭和五十一年から四年間は主任教授として、草創期の本学の基礎づくりのために活躍された。研究面では溶融池のメカニズムについて石崎理論（表面張力論）を発表され、昭和三十八年には溶接学会論文賞を受賞されたが、本学着任後も精力的に研究を進められ、講演会では最新の研究成果が披露された。また、教育についても小テスト方式を考案し、長く実施されたが、その成果についても熱弁を振るわれた。

講演会に続き懇親会が開かれ、機械工学科のメンバーに加えて、学長をはじめ親交のあった教職員の参加を頂いた。その中で、本学の今後の教育・研究のあり方について、先生から貴重な御意見を頂いた。先生の「万年青年」ぶりがいかんなく発揮された会となり、参加者に大きな感銘を与えた。

（機械工学科主任教授　玉木　保）

☆　☆　☆

石崎先生

吉岡先生 記念講演会

去る三月十八日に建築学科吉岡丹教授の定年祝賀会が学友会館で催された。これは、同研究室の卒業生が発起人となり主催したもので、卒業生・現役を合わせて四十一名が出席、来賓、関係者を合わせて計七十名余の賑やかな会となった。その中で、吉岡先生の記念講演が企画され、先生はこれまでの御自分の職場・研究環境が良き師・よき友・良き学生・良き同僚に恵まれた事を感謝しつつ、多くの例をあげて話された。また四書「大学」の言葉から「格物到知」をあげ、教え子への研究テーマあるいは今後の社会活動における多くの示唆・指針をあたえてくれる講演となった。

（建築技術研究センター主任・講師　川村　清志）

☆　☆　☆

吉岡先生

平成3年度 日本工業大学 入学試験日程

□お問合わせは　⇨　日本工業大学 教務課 入試係
〒345　埼玉県南埼玉郡宮代町学園台4－1
☎0480－34－4111

《推薦入学》

出願期間	10月1日～10月13日
小論文試験	10月24日
合格発表	10月31日

出願資格
本学が指定する工業高校（高校の工業科）の現役で、成績概評がB以上の者。志願学科と同系統の工業科を履修していること（システム工学科を志願する場合はこの限りではない）。
（注）出願書類等は高校の進路指導室へ送付されます。

※推薦入学は書類選考を原則とするが、書類のみによる選考が困難な者に対しては、さらに小論文試験を実施する。

《一般入学試験》

試験日	出願期間	合格発表
2月12日 機械工学科 電気電子工学科	1月9日～2月7日	2月21日
2月13日 建築学科 システム工学科		

試験科目

志望学科	A方式	B方式
機械工学科 電気電子工学科 建築学科 システム工学科	数学—数学Ⅰ、代数・幾何、基礎解析、微分・積分、確率・統計（「統計的な推測」に関する部分は除く） 理科—物理（理科Ⅰの物理の関連分野を含む） 英語—英語Ⅰ、英語Ⅱ、英語ⅡB、英語ⅡC	数学—数学Ⅰおよび選択科目（「工業数理または「基礎解析・微分積分」） 専門—志望学科の専門科目 英語—英語Ⅰ、英語Ⅱ

※システム工学科は機械、電気・電子、情報技術関係科目より選択

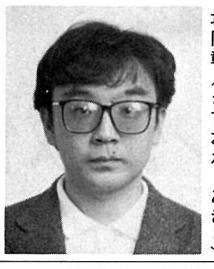
人事異動

＝四月一日付＝

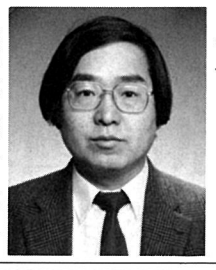
任用

○教養科　教授
佐々木富三（ささき・とみぞう）
大正十三年十月十日生。昭和二十四年三月、京都大学農学部農林経済学科卒業。前広島大学生物生産学部助教授。

○教養科　講師
市川泰弘（いちかわ・やすひろ）
昭和三十四年二月二日生。昭和六十年三月、東京学芸大学大学院修士課程教育学研究科英語教育専攻英語学講座修了



○教養科　講師
増岡彰（ますおか・あきら）
昭和三十六年八月三十一日生。平成二年三月、筑波大学大学院博士課程教育学研究科数学専攻単位取得退学



○システム工学科　助教授
三宅正二郎（みやけ・しょうじろう）
昭和二十二年二月二十八日生。昭和四十四年三月、大阪大学基礎工学部機械工学科卒業。前日本電信電話株式会社電子応用研究所主幹研究員。工学博士（東北大学）

昇任

○建築学科　教授
難波恒夫（なんば・つねお）
昭和十三年一月五日生。昭和三十五年三月、熊本大学工学部建築学科卒業。東京工業大学理工学部建築系助手、および同教員養成所建築学科助教授をへて、昭和四十四年四月、本学建築学科助教授。主な研究テーマは、山形鋼筋違に関する実験的研究。

○教養科　助教授
城戸卓男（きど・たくお）
昭和二十五年六月三日生。昭和四十七年三月、日本体育大学体育学部体育学科卒業。昭和四十七年四月、本学教養科（保健体育）助手。五十六年、同専任講師。主な研究テーマは、サッカー技術に関する研究。

○機械工学科講師
村上尚司（むらかみ・しょうじ）
昭和十四年五月二十三日生。昭和四十三年三月、武蔵工業大学工学研究科機械工学専攻修士課程修了。昭和四十三年九月、本学機械工学科助手。主な研究テーマは、マイコンによるピストンの温度分布と熱変形測定、プラズマ溶射によるセラミックコーティングの研究。

退職

＝三月三十一日付＝

○岡本鐳輔　教養科教授（定年）
○平賀義彦　教養科教授（定年）
○石崎敬三　機械工学科教授（定年）
○高橋琢二　電気電子工学科教授
○広川勇一郎　建築学科教授（定年）
○吉岡　丹　建築学科教授（定年）
○杉本安次郎　システム工学科教授（定年）
○南山芳文　電気実験研究センター（定年）
○辻　陽一　教養科助教授
○池山　保　教養科講師

受賞式（昨年度）

第四回 日本工業大学建築設計競技

募集要項決まる

本年度の日本工業大学建築設計競技募集要項が決定した。本設計競技は学校法人東工学園（現学校法人日本工業大学）創立八十周年および日本工業大学創立二十周年記念事業として昭和六十二年から始まったもので、今回で第四回となる。なお、募集要項は建築科を持つ全国各工業高校に郵送される。

募集要項（抜粋）

〈課題〉
北斜面に建つ住宅の設計

〈課題の目指すもの〉
近年の住宅地不足の状況下では、必ずしも好条件の宅地に住宅を建設できるとは限りません。この課題では、採光条件などで嫌われがちな北向きの斜面を敷地として設定しました。敷地の高低差を立体的に利用し、悪条件を逆手にとって楽しい住宅を設計して下さい。なお、北側隣地の採光等、周囲の環境にも十分配慮して下さい。
また、大規模な造成などが環境問題を引き起こしている現状を考え、自然の地形を生かし、大幅に変更することなく設計してくれることを期待します。

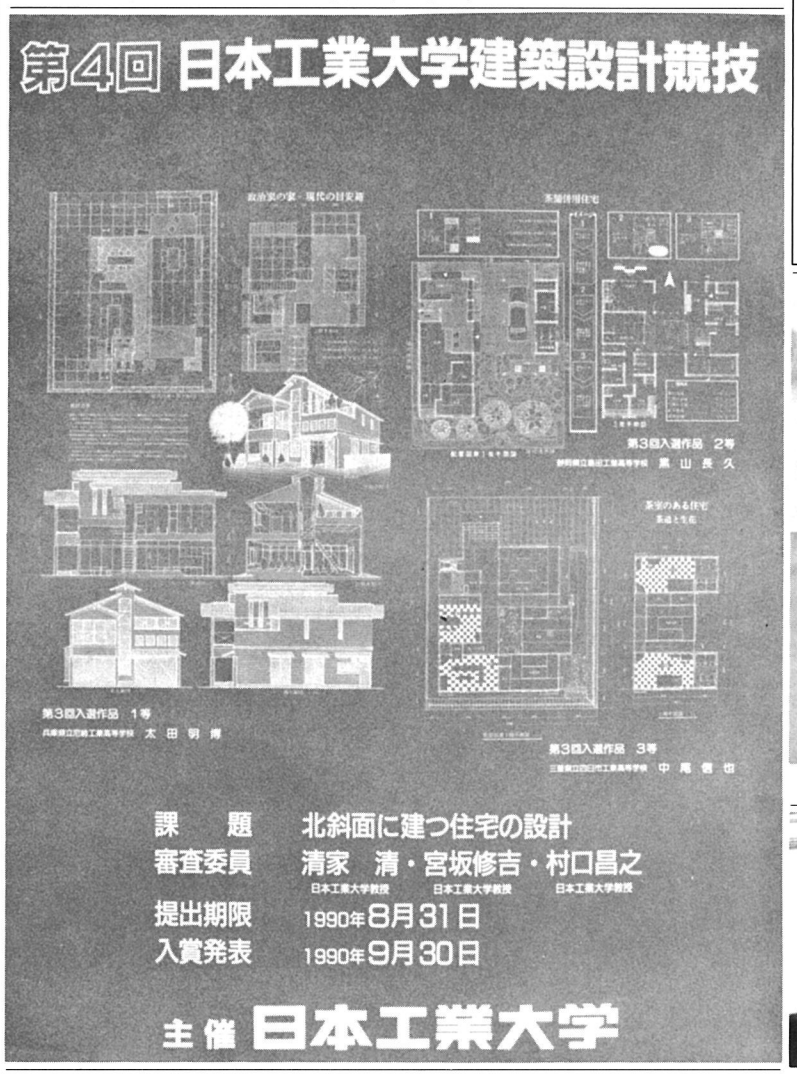
〈応募資格〉
応募時に高等学校の建築科またはこれに準ずる学科に在籍しているもの。

〈提出期限〉
一九九〇年八月三十一日

〈審査委員〉
清家　清・宮坂　修吉
村口　昌之
（日本工業大学教授）

〈入賞発表〉
一九九〇年九月三十日

〈受賞式〉
一九九〇年十一月四日



清家教授による講評（昨年度）

国際交流の輪ひろがる

キングモンクット工科大（タイ）より学部長等来学

タイのキングモンクット工科大学より、四月十一日から十三日にわたり、工学部長デッチ・ブッチャラントゥン氏、生産工学科主任教授アッタコーン・グランクワンディー氏、電気工学科主任教授チャラムール・ナムカン氏の三名が来学した。一行の目的は本学との交流の将来計画について話合うためで、教員の相互交流、共同プロジェクト等の案が出された。

タイ・キング モンクット大学一行

高苑工業専科学校と学術交流協定を締結

平成二年四月一日付をもって中華民国高雄省の高苑工業専科学校（創立者余陳月瑛氏、余玲雅理事長、廖峯正学長）と本学との間で、学術と技術交流協力に関する協定が締結された。

中国内蒙古自治区教育代表団来学

五月二十三日、中国内蒙古から、王国士同政府副秘書長を団長とする教育代表団四名が本学を訪れた。一行は内蒙古からの客員研究員の蘇和氏を交え、大学関係者と蘇研究員の研究テーマや今後の本学との協力関係について話合った。

セネカ応用科学技術大学との間で、環境問題委員会設立へ

三月二十七日、カナダよりセネカ応用科学技術大学の副学長S・E・クインラン氏一行が来日、本学大川陽康学長との間で環境問題に関する共同特別専門委員会の設立が話合われた。両者は基本的な点で合意、同委員会設立同意書にサインがなされた。

内蒙古教育代表団

本学教員相ついで学位取得

東京理科大学より新妻助教授に理学博士授与

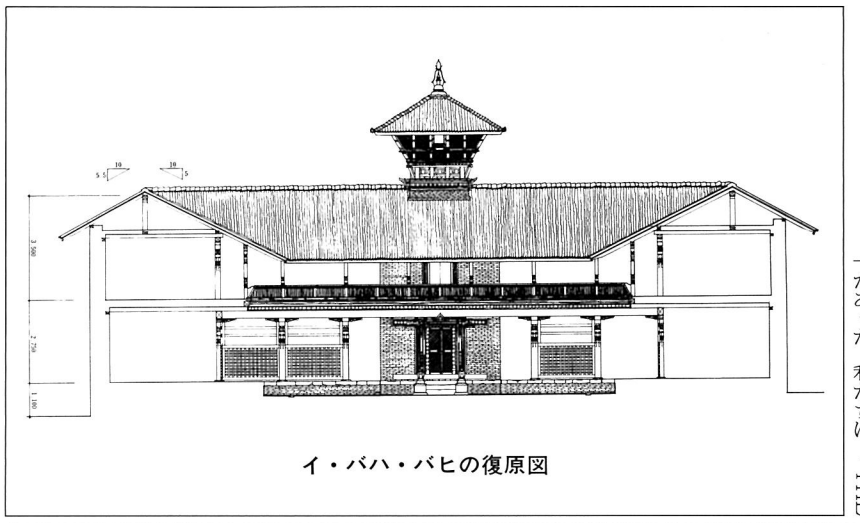
教養科（数学）新妻弘助教授に、平成二年三月二十日付で東京理科大学より理学博士の学位が授与された。博士論文名はp-BASIS IN REGULAR LOCAL RINGS AND POLYNOMIAL RINGS（正則局所環と多項式環におけるp-基底）

☆　☆　☆

研究室では㊳

ネパール仏教僧院復原計画

渡辺勝彦研究室



イ・バハ・バヒの復原図

ネパール建築の研究を始めて十二年になる。ネパール建築の独特な建築様式は、中国とインド、二つの文化の間にあって建築史学上その位置づけが課題となっている。同時にこの存在は世界的な文化遺産として評価され、保存が求められている。

私たちの研究「ネパール王国古王宮の研究と保存対策」も、将来の保存対策をめざしての調査研究であった。

藤岡通夫先生を中心にして、波多野純先生など日本工業大学を中心に共同で進めてきた研究である。文部省科学研究費と大学の支援を受けて進められ、二冊の研究報告書と共同研究者の審査論文などによって国内外で新たな研究分野を開拓し、評価されてきた。

今回、実際の保存プロジェクトを研究として企画し、この秋から工事が始まる。この経過を報告させていただく。

実は実際の保存プロジェクトについては、以前にも動きがあった。私たちは、『THE ROYAL BUILDINGS AND BUDDHIST MONASTERIES OF NEPAL』（中央公論美術出版　一九八五）で、ガンダーラの遺跡と同じ平面を持ち、現在も使われているネパールの仏教僧院の復原案を提示した。ユネスコのカトマンズ盆地保存計画を策定したゼクラー博士（ハーヴァード大教授）は早速、仏教僧院の保存に着手して将来の王宮などの保存計画に備えてほしいとの要請を送ってこられた。

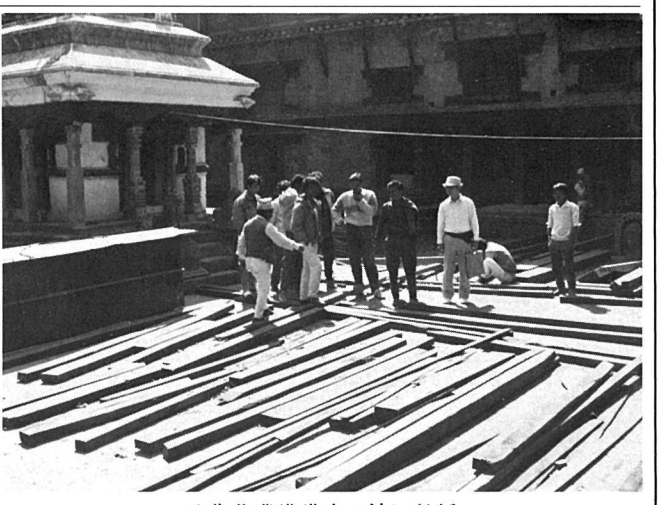
一九八八年になって機が熟してきた。それまで暖めていた仏教僧院復原計画を、本学の強力な支援を得て進めることになった。この支援の判断は今になってみると実に時宜を得たもので、少しでも遅れていれば、私たちの計画は国際的にも国内的にも意義の弱いものになったであろう。

この年の秋に、来日したネパール政府教育省考古局長、ユネスコ文化財保護部担当官と実施の方式などを打ち合わせ、関係者との交渉を始めた。

交渉を始めて間もなく、情熱を注いでこられた藤岡先生に逝かれてしまった。私たちは、なんとしてもこのプロジェクトをやり遂げようと誓うだけであった。

八九年に入り、二月には渡辺・黒津が現地に赴き、具体化に向けての調査・折衝を始め、対象にカトマンズの隣パタンにある僧院イ・バハ・バヒを選定した。五月には渡辺がゼクラー博士を訪ね、またカトマンズにもたびたび足を運んで交渉を重ねた。

プロジェクトは、考古局との合意をまず得て具体化していった。十一月には、考古局長・市長・地区長・校長など関係者に一同に会してもらい、プロジェクトを進めること、イ・バハ・バヒを使用している小学校は工事の期間移転すること、との合意書調印に至ることができた。



修復作業準備中の渡辺教授

こうしたプロジェクトは、自己満足的、自閉的になってはいけないとの観点から、関係機関と協力体制を築くこととした。協力によって社会的にもインパクトが強くなるし、ことを進める体験もできる。国内では、日本の重要文化財建造物を保護し、高い修理技術を持つ文化庁文化財保護部建造物課、国外では当該国ネパールの考古局、そして世界の文化遺産保存に携わっているユネスコと補いあうのがよいと考えた。

文化庁はその後「アジア・太平洋地域等文化財建造物・遺跡の保存修復協力」を打ち出し、その第一弾としてこの協力を位置づけることとなったのである。

また文部省からも、この新たなプロジェクトに関連して科学研究費一般研究が与えられていたが、さらに九〇年に同研究費国際学術研究に「ネパール王国仏教僧院の建築技術調査と保存対策」（渡辺・波多野・黒津）が内定した。

二月には訪ネしてギャランティの了解を得、手続きの打ち合わせを行った。また、解体・復原の費用見積案について協議した。

なお、このときJALの雑誌ウィンズの取材があった。日本が海外で取り組んだ文化財保存の例として紹介されている。五月にJALに乗られたら、ご覧ください。少し大きい書店でも置いているそうです。

三月には、文化庁の調査官と再びカトマンズを訪れ、復原工事の基本方針を立てることができた。

研究室では、博士課程でネパール王宮建築の研究に励んでいた黒津君、ネパールからこの日に備えて建築の勉強に留学し修士課程を終えて実務経験を積んできたマナンダール君が、このプロジェクトに参加している。そして、修士課程の院生二人が加わった。

僧院には復原後ネパールの伝統的文化の資料室を設けようと企画している。そのための設計も要る。解体までに用意しなければならない案件は、山積している。毎日議論を戦わし、復原の詳細な図をつくり、見積を検討しているところである。

この二月から四月には新聞・テレビなどで報道されたように、ネパールでも民主化を求めて大きな動きがあった。しかし、国王が民主化を認め方向転換したのは意外に早かった。思ったより迅速なことの成り行きは、プロジェクトに大きな障害を生じさせないだろうと楽観している。私たちが決して政府レベルだけでなく、現地の、町の人々と直接交渉し、関係を築きプロジェクトを段取ってきた、微かな自信である。

会議の休憩時間

まもなく現地に基地を築く。これまでの研究でも大学の多くの方が暖かくご協力くださった。これからのプロジェクトにも、変わらぬご支援を改めてお願い申し上げる。

（渡辺勝彦・建築学科教授）

☆　☆　☆

プラズマ理工学国際会議出席こぼればなし

塚林　功

昨年の暮十一月二十二日から二十八日までインドのニューデリーでプラズマ理工学国際会議が開かれ出席した。インドに出発する前から、インドは日本の約五十年前、第二次世界大戦前の日本の田舎の状況に似ており、行って見て驚くだろうと聞かされていた。タイム・トンネルではなく現実の飛行機で自分の生れる以前の生れ育った故郷の情景が目のあたりに出来るとあって、期待と不安にかられつつ不慣れなワープロで原稿をまとめていた。多分国際会議等に出席される他の先生方も海外に出掛けられるという期待で一年以上も前から平常の何倍もの努力と根気で研究を進展させ準備されている事と思う。

出発便の遅れに到着の大幅な遅れ、ようやくたどり着いた所が聞きしにまさる「喧騒とほこりの街」デリーである。インドの気温はHot, Hotter, Hottestと云われているが十一月から一月は乾季で最もしのぎ易い時節と云われている。インドの通貨はルピーで一ルピーは十円弱、物価は日本の五分の一程度だから米ドルで百ドル交換すれば日本円で一万四千円、インド通貨で千五百ルピーで会議期間中の交通費、食事代は十分まかなえる金額である。お金を持つと安心する金満国日本人の貧しい性格、銀行でトラベル・チェックを新品のルピー札束に交換し、気軽にニュー・デリーとオールド・デリーの境界にあるコンノート・プレースという広場へ散歩に行った。ここはヴィクトリア女王の三男のコンノート公爵（元ボンベイ管区軍司令官）にちなんで命名された円形の広場で、観光客にとってはパリのルーブル博物館前の広場に匹敵する場所なのかも知れない。さっそく靴磨きの少年が私の履いている運動靴に穴があいているから修理させろとうるさくつきまとう。少年に気をとられているスキに誰か私の指をマッサージしている男がいる。どうせ疲れているのだからとなすがままにマッサージをさせていたら、最後に古びたノートを取り出し広げて見せる。日本語に書かれた頁には「僕はインドに着いた初日にコンノート・プレースに来た。ここでマッサージ師に会いすばらしいマッサージをしてもらった。最後に一万円も払わされた。」と書いてある。彼は分かったかと云うから、私は頼んだ訳でもないしお金も持っていないからと友人に十ルピー借り渡すと、友人の財布の札束を見てもっと借りろと結局三十ルピー払わされた。インドに来て物価が安い事もあり自分でもびっくりするぐらいケチになっていた。インドではお金を無心する子供達がいるが、ゆすり・たかり・暴力のたぐいは無いようで、かつてのカースト制に由来するのか、貧しい者はお金持ちからもらって当然という認識があり、道行くインド紳士が何気なく数ルピー渡しているのを良く見かけた。

インドは日本では仏教の発祥地として知られているが、仏教を広めた釈尊「ブッタ」はインドではヒンズゥ教の神様の一人として位置付けられており、聞き覚えのあるお経がインドの言葉であるのに驚いたりする。インドでは公用語で十四、その他で千以上もあるといわれるくらいの多民族国家で、人々はその中で有史以来何にも変わっていないのではないかと思えるぐらい悠然と生活している。プラズマの会議終了後日本の参加者グループとヒンズゥ教と仏教の寺院遺跡の見学に出かけた。デリーの南東部五百kmにカジュラホという小さな町があり十世紀前後に建てられた石造の寺院群があり、この寺院の外壁には数千体の神々・人間の官能的な裸体彫刻が施されている。当時八十五の寺院が存在したが、偶像崇拝を嫌うイスラム教徒の支配下時代に破壊され現在二十二の寺院が残っているという。当地で雇った観光ガイドの説明が興味深かった。この多数のセックス賛美の裸体彫刻群が意味するところは、かつて全宇宙が真暗闇で、かすかな一条の光明の中から男と女が生れた。男性は「Consciousness（意識・知覚）」で女性は「Energy（エネルギー）」でこれらが「Fusion（融合）」し宇宙の物質元素である「Proton（陽子）・Electron（電子）」等を生み出したという。Energy, Fusion, Proton, Electronという科学用語を聞いて、全員会議の事を思い出し大喜び、宇宙物質が形成されてからどうなるのかと質問すると生れては死んでの輪廻で繰り返すと「輪廻」は今回の会議でも主テーマとなっている「非線形現象」や「Chaos（カオス・混沌）」に現れる特徴的な用語で、一段と聞く側が乗り気になり質問攻め。このインテリ観光ガイドは私の解説を全て理解できた日本人は初めてだと大喜び、この続きは明朝、もっとおもしろい彫刻がある寺院でするからと打ち切られた。特に私にとってはこの「輪廻」、我々は「Recurrence（再帰）」と呼んでいる現象が今回の発表論文のテーマであり、研究テーマの源が紀元前千年も前からインドのヒンズゥ教の中で考えられ存在していた事に驚くと同時に、再帰現象やカオス（混沌）がその先に行き着く終点が存在するのかという疑問にカジュラホの官能的女神がヒントを与えてくれそうに思っている。このガイドとかマッサージ師の英語を除いて、インドの英語（Indish）はちっとも聞きとれなかった。

コンノート・プレースのマッサージ師

最後に会議参加にあたたかく援助して下さいました大学の皆様に「ナマステー（合掌しておれ）」。

（教養科助教授）